

## 歴史点描 23 大江島古川のお地藏さん

大江島の村の中心を東から西へと、かつての室街道が通り抜けています。古川にさしかかる大江橋の北向い、支流との合流地点（西門樋町）にお堂があります。お堂の中に台座も含めると約2メートル25センチ、像だけでも85センチの大きな地藏菩薩が東を向いて座しています。台座の上の4体の小さな地藏と共に座すお姿は大きく堂々としています。

この地藏は戦国の世、弘治2年（1556年）、非業の死を遂げた梶山城主（掛保川町）第7代肥塚和泉守祐忠をはじめ先祖の霊の弔いに、子孫の肥塚昌秀栄心尼が文化13年（1816年）に建立したものです。

弘治2年肥塚和泉守祐忠は、室山城主（御津町）浦上政宗の招きで室津に向かった留守に、居城梶山城を楯岩城主広岡五郎則弘に襲撃されて落城。奥方白菊は自害、乳母に託して逃した3人の子の中の末子祐行は、当時6歳でしたが、乳母と共に阿賀に逃れ、その後大江島に定住し、大江島肥塚本家の始祖になりました。

江戸時代後期、今から約200年余り前、肥塚本家八代目九兵衛が、網干川南の酉高に新田を開拓し、一軒家と呼ばれる邸宅を建てて住居としました。その後、隠居し、一軒家を長男に継がせ、末子と共に大江島の中心に居を構えました。現在のお堂は、明治になり、肥塚照治氏によって建てられました。照治氏は、大江島最後の庄屋を務めた肥塚慎八の孫で、大蔵省の技師となり、現国会議事堂の建設に参画しています。隠居家肥塚家現当主の祖父の代の頃までは、毎朝地藏の掃除をし、水を替えていたそうです。8月23日の地藏盆には御詠歌をあげ、子供たちにお菓子を配っていましたが、最近は子供の数の減少もあり近い人達で行っているそうです。

200年以上もこの地に座すお地藏様、今のこの穏やかな日々が続くように私たちを見守っています。

参考文献：井上清太郎編『大江嶋物語』 大江島広報『郷土史こぼれ話』②  
網干歴史講座会員 和木節子

